

味、家集の性格など、種々の角度から検討を加えてきた。

現存する諸本はほぼ同一系統とみなしてよいが、なかでは青山本が善本であること、また、自筆懐紙と家集の間には幾首かの一致歌があり、「智閑集」がまさしく智閑の詠草を取録したものであろうことを確かめてきた。

さらに詞書には、明らかに不審なものや矛盾するものもあるが、智閑の交友圏からみてかなり信頼できるものも多いことを述べた。この家集には、智閑への権威付けと、彼の神仏への信仰の深さを顕彰する面があることも跡付けられた。

これは単に、文芸をたしなんだ智閑一人の問題にとどまらず、近江の豪族蒲生氏の権威ともかわる。

室町期の地方の守護大名や豪族たちが、武の充実だけで満足できず、こぞって京洛文化の摂取につとめ、文化人を地方に招待していたが、「智閑集」の性格のなかには、彼らの願望の曲折した姿が窺える。

注1 和田英道氏の御教示によると、白杵市立図書館にも一本が所蔵されている由。

注2 智閑の自筆短冊や懐紙には、この他に、小松茂美著『日本書流全史』に、短冊一枚、詠草断簡一葉（二首）、伏見宮家旧蔵「短冊手鑑」に、短冊一枚などがあるが、いずれも「智閑集」の歌と一致するものがみいだせないので特に触れなかった。

注3 金子金治郎・伊地知鉄男編『宗祇句集』（貴重古典籍叢刊12）による。

〔付記〕 立教大本の閲覧には、井上宗雄氏の御世話になり、金子先生には御架蔵本をわざわざ送っていただいた。各々厚くお礼申し上げます。

（昭和五十二年十月十五日受理）

た。

しかし、はっきり誤りであると断定できるのは意外と少なく、状況からみて可能性のありうる記事が相当多くあることがわかった。ただ、そのものも、年月日においては、誤写や誤認によつたものがあることは留意せねばならない。

#### 四、家集の性格

「智閑集」は自撰か他撰か、はっきりした根拠をつぎとめえないでいるが、不審な詞書があったり、懐紙の合点歌でない歌もかまわず採入しているところからみて、編纂過程に他人の手が加わっていた可能性がある。たとえ、智閑自身が自撰したものとしても、少なくともある段階で、他人の追補があつたように思われる。

収録範囲は、文明六年（一四七四）の詞書が一番早く、永正八年（一五一一）が一番おそいので、約四十年近い期間の詠草を含むことになる。そこには、先の懐紙と家集の一致歌でも明確になつたように、出家以前の貞秀時代のものが相当あるし、晩年のものも含まれる。いわば智閑の生涯の作歌活動にわたるものである。

「智閑集」はどのような目的で編纂されたのであろうか。智閑の長期間にわたる作歌活動の集成であることはわかるが、それ以外にも目的をもつていたようである。

その一つは、これまでも触れたように、和歌活動を介しての、地方豪族で文化人でもある智閑の権威付けである。

地方の豪族が御製を下賜されたことや禁裏御会に出詠した記事は、事実かどうかはともかく、類まれな誉として記しとどめていることは確かである。將軍家月次会への参加もこの線上にある。また、飛鳥井家の雅親、雅俊、雅康などの記事も、京洛歌壇の中心的な歌人との交渉のあつたこと

の宣揚になり、宗祇や宗碩なども、身分は高くないが、著名な連歌師との交誼を示すことになる。

このように、詞書の多くは、文化人としての智閑の権威付けにかかわっている。詞書を付加すれば、各和歌には、もつと詠歌状況が記されたはずであるが、自邸での歌会その他の名もない仲間のこととは省略してしまつてゐる。「智閑集」の性格の一端に、智閑への権威付けをみるゆえんである。

あと一つ、詞書で注意されるのは、神社・仏閣への法楽歌のことを特に記していることである。そこでは、

文明八年正月十一日、伊勢太神宮へ法楽（一一一）

文明六年五月一日、春日社へ参詣侍る時（八二九）

文明十年九月十五日、伊勢太神宮参詣して、法楽の歌よみたまつる

（八四五）

などと、年月日を明示したもののほか、

太神宮へ十首の法楽歌奉る時（八二六）

の事柄だけのものがある。

法楽先で一番多いのは、伊勢神宮で十回も詞書にてくる。そのほか、日吉神社が五回、ついで住吉神社が三回あり、玉津島、高野山、長谷寺、春日神社などがあり、全体でかなりの数にのぼる。

この事實は、同時に、智閑の神仏を帰依する態度の熱意を示すものである。

「智閑集」の詞書は禁裏や將軍家などの権威ある家や京洛文化人との交渉を示すものと法楽歌記事でほとんどつきるといつてよい。「智閑集」の性格として、この二面が指摘できるであろう。

#### おわりに

詞書に問題をほらむ「智閑集」に対し、諸本、懐紙との関係、詞書の吟

④「永正二年極月廿五日、雪いと降りければ宗祇もとより」(五三三)

⑤「永正三年十二月十五日、宗硯(つとむ)下向ありて歌よみけるとき」(五四八)

宗祇と智閑の交誼も、初編本「老葉」(吉川本)に註3

蒲生の藤兵衛尉館へはしめてまかりたりし時

とりのねにはなの宿とふ山路かな(一九七二)

蒲生藤兵衛尉館にて、三月盡のころを、千句に

けふのみとおもはてのこれ春のはな(二〇二二)

とみえるほか「下草」(一三三九)、「宇良葉」(一三・一九二・四四二)にも

蒲生邸での連歌会のことのみえる。両者の自筆書状も現存し(岩園吉川

家藏・天理図書館藏など)、その点、先の①②③の詞書も信用できると思う。

ただ、④は宗祇没後のことなので、「宗硯」の誤認か、⑤も「宗碩」の誤

写であろう。また、家集「宗祇集」には、

蒲生兵衛尉やとりにて、宗匠くたり給し時の会に、山家待郭公とい

ふ事を

ほととぎすわかすむ嶺のまつこともたえぬる身とおもはさらなん

とみえるが、この「山家待郭公」の歌題は、

①の文明六年四月二十日の、

山家待時鳥

世の中はうきにもせめてまきれなん住をわするな山郭公

のそれと一致し、しかも「宗匠」(柏木殿)が同座していたことも符合

し、①の詞書の歌会を指すとみてよい。従って、この詞書の信頼は増すこ

とになる。

この他には、同じ蒲生郡の佐久良の城主である小倉実澄が数度顔をだ

す。

①「文明七年三月に、柏木殿佐久良なと寄合て」(三二二)

②「文明七年三月十一日、実澄二社の明神勸請」(八二七)

③「文明九年六月晦日、実澄会に」(二八一)

④「文明九年七月三日、実澄公の家の会にて」(二九三)

⑤「文明十年三月晦日、三条実澄の月次」(七〇四)

⑥「明応七年十二月廿日、実澄月次に」(五四九)

このうち④は、天理、松平、金子の各本では「三条実澄」となっている

が、青山本のように「三条」のない方がよい。三条西実澄と誤認した後人

のさかしらであろう。その点、⑤はすべての諸本に「三条実澄」とあるの

で「実隆」の誤写かもしれないが、「実隆公記」の同年月日の条には月次

会はないので、これも「小倉実澄」の可能性が強い。

智閑と実澄とは、同じ蒲生郡に住み、しかも智閑の妻と実澄の妻とが姉

妹関係だったこともあり、かなり親密であったようだ。先の詞書も信用で

きるきとする。

最後にとりあげたいのは次の贈答歌である。

文明十三年三月十八日に、父秀綱みまかりてのち、

室町殿へ参ければ、かくなん仰たまはりける

面影は月に残りて一時にさむるははやきいにしへの夢(八〇二)

返し歌申上よと仰有ければ

忘らるゝ心や夢となりぬらんそのいにしへも近き名残を(八〇三)

これは父秀綱の死没年時を示す重要な記事であるが、室町殿と贈答したと

いうあたり、先の七十賀で御製を下賜されたという記事を想起させるもの

があり、全面的には信用できないかもしれない。が、父の死没年時は偽造

とは思えない。

以上、現存する他の資料を援用し、できるだけ「智閑集」の詞書の信頼

性を検討してきた。

御製を下賜されたとか、禁裏御会に出詠したとか、地方の豪族の身分か

らして、ありえないような詞書が散見されこと、加えて同年月の諸記録に

歌会の記事がみえないことなどもあって、詞書は大いに疑問をもたれてき

雅親が応仁の乱以来、近江国柏木に折々くだつて住んでいたことは確かな事実である。特に家集「丑槐集」の「同年（文明六年）九月廿九日、柏木郷より蒲生郡、新熊野へ参詣の道すがら」（七〇六）などの歌会記事などをみると、「智閑集」にこの前後の柏木殿との交友をのせているのは史実の可能性がある。智閑家の月次会が毎月二十日であったらしいので、①⑤の「三月廿日」「四月廿日」の歌会も彼の邸でのものかもしれない。③④の太神宮の記事はすでに触れたように自筆懐紙があり信憑性がある。⑥の贈答歌は、

文明十五年十二月十一日に雪降ければ、柏木殿よりたまはりける

今よりは千代もきまさん此宿とみるかひふかき山の白雪（五三一）

返し

君ふかき山路も雪の長閑きはいかて心に春やきぬらん（五三二）

であるが、雅親の「続丑槐集」に

文明十五年十二月十一日に雪ふりける日、蒲生智閑のもとにて

今よりの千代もきまさん此宿とみるかひふかき山のしらゆき（三〇七）

返し

君ふかき山路も雪のとききはいかて心に春やきぬらむ（三〇八）

と一致歌があり、「智閑集」の詞書の史実性が確認できる。（但し、「続丑槐集」は雅親自撰でなく、雅章が資料を博搜して編纂したもので、この贈答歌も「智閑集」あたりと関連するかもしれない。）

飛鳥井雅親との関連に触れたついでに「智閑集」に顔をみせる、飛鳥井家歌人として、雅俊と雅康の記事を検討しておく。

雅俊の記事は、

①「飛鳥井中納言雅俊卿の家の月次会の時」（七七）

②「永正二年後八月廿日、飛鳥井中納言雅俊卿月次に」（三八一）

二箇所に出ており、どちらも月次会のもの。雅俊と智閑とが交誼のあつ

たことは、雅俊の家集「園草」（井上宗雄氏蔵）に

蒲生刑部大輔、年始の会に、鶴有遅齡

おのかへんかきりはしらし白鶴のやとれる松は生かはるとも（三〇〇）とあることや「雅俊百首」（書陵部ほか）の奥付の

于時永正八年二月中八日書之 藤原高弥

右此百首者飛鳥井権中納言雅俊卿之詠草也

智閑法師依御所望子息雅綱卿令書写被遣者也

から認識できる。因に②において、永正二年は雅俊の中納言時代で矛盾しない。

雅康の記事は、次の一箇所だけ。

明応八年七月十一日、二楽院殿、富士へ参詣有て下向の後によるこ

ひの会侍る時、社頭祝

曇なき日吉の影をあふき来て道すなほ成世を祈る哉（八三四）

雅康と智閑の交誼も「雅康御詠草」（大阪市立大本）に、

江州蒲生刑部大輔貞秀許にくだり侍し時、郭公遍

さとなれてあまりになくも時鳥はやくみ山にいらんとや思ふ（一〇三）とみえ、早く、貞秀時代からあったようだ。

「智閑集」のこの詞書は、雅康の「富士歴覽記」（類從卷二三五）によると、明応八年五月に富士歴覽のために都をたち、六月下旬に上洛の途につき、七月七日の関部大夫宿所での会まで記している、七月十一日に「よろこびの会」がもたれた可能性があり、信用できるものであろう。

この他に、宗祇や宗碩など、当代の著名な連歌師が登場する。

①「文明六年四月廿日、柏木殿宗祇法師などより合侍て、歌よみける時」（一九六）

②「文明九年正月廿七日、善隆寺へ、宗祇など友なひて、梅の花みるとき」（三四）

③「文明九年三月廿日、宗祇法師興行にて、和歌の会侍る時」（一七三）

ための作為が目立つ。おそらく後人のさかしらであるろう。」(『新撰菟玖波集の研究』)と不審な詞書の背景を述べられた。

まず、はっきりと史実と矛盾する詞書から指摘する。

①「永正二年極月廿五日、雪いと降りければ、宗祇もとより」(五三三)と贈答歌を記すが、永正二年(一五〇五)に宗祇はすでに死没(文龜二年(一五)している。

②「長享三年六月六日、常徳院殿月次」(六〇二)とあるが、長享三年(一四八九)六月に、常徳院義尚は死没(延徳元一四九三年三月二十六日)している。

③「文明八年三月五日、専順法眼追善会に」(七九七)とあるが、専順の死没は、普通「大乘院事社雜事記」の文明八年四月二日の条の「六角堂柳本専順法眼去月廿日於三乃國被□□連歌名人也、不便事也」によって、文明八年三月二十日とされるので、三月五日はまだ死没前となって矛盾する。

以上の①②③は、詞書に登場する人物の死没時期と齟齬する点で共通する。後人の意識的な捏造でなく書写間の誤りとすれば、①は宗祇→宗碩の誤写、②③は年月日のあたりの誤写があったとみるほかはない。

次に、当代の記録類に、詞書のごとき記事のみえないものを列挙してみる。

- ①「文明九年卯月十日、禁裏にて、人々歌よみける時、雨後時鳥といふ題を給りて」(二一〇)とあるが、「実隆公記」「親長卿記」などの諸記録にあたって、同日に禁裏御会があった事実を確認できず不審である。
- ②「明応二年三月廿日、禁裏三時の御會に」(六九四)
- ③「明応三年九月五日、禁裏三時の御會に」(七八七)
- ④「文明七年二月廿七日、室町殿御會初」(七〇三)
- ⑤「明応二年八月廿日、將軍家の月次會」(三〇九)

など、いずれも当時の記録類に、その歌会を確認できないのも奇妙である。

この他「明応三年十月三日、七十賀の歌たまふ」(八二〇)〜(八二二)と御製を記すが、これも身分柄、ありえたかどうか疑問である。

しかし、ここに列挙したものは、すべて絶体に誤りであると断定はできない。当時、地下歌人や地方の武士などは、直接に内裏や將軍家の歌会に出座しなくても、その歌会に提出された歌題を与えられて、和歌だけ提出するケースも珍しくなかった。「智閑集」の禁裏や將軍家の歌会記事もあるいはそういう場合を意味しているのかもしれないが、いずれにしても年月日には不審が残る。

この他には、はっきり信用できない詞書は少なく、むしろ、智閑の生前の交友圏からみて、信頼できそうなものも多い。

まず、当代の著名な歌人や連歌師の顔がみえる詞書から検討してゆく。一番多いのは柏木殿、即ち飛鳥井雅親である。

- ①「文明六年四月廿日、柏木殿、宗祇法師などより合侍て、歌よみける時」(一九六)
- ②「文明七年三月に、柏木殿佐久良など寄合て」(三二二)
- ③「文明七年三月に、坂本和当堂にて、柏木殿廿首の歌よみ侍る時」(七一)
- ④「文明七年三月二日、三雲妙鑑寺へ柏木殿花見に御出侍る時、よみてつかはしける」(一三五)
- ⑤「文明八年三月廿日、柏木殿山上へ御出有歌詠ける時」(一五七)
- ⑥「文明十五年十二月十一日に、雪降ければ、柏木殿よりたまはりける」(五三二)〜(五三三)
- ⑦「柏木殿、坂本の御宿へ御出有て、人々歌詠ける時」(四八)
- ⑧「柏木殿、太神宮へ御参詣の時、花といふ題にて」(九五)
- ⑨「柏木殿、太神宮へ御参詣の時、いすゞ川の月をみて」(三三六)

この二首のうち「春も猶」の歌が三二番と一致する（異文なし）。詞書に「文明七年三月に、柏木殿佐久良など寄合て」とある。これを信用すれば、文明七年はまだ「貞秀」で出家以前となる。

(6) 花 貞秀

神のおしむ花さへ春にのこらすはかせのしつけき山もたつねし  
ちることはなくもあらなん春の花神の心に風をまかせて

月

いすゞ川水上きよくすむ月に君かちとせのかけもみえけり  
てる月に心のやみもはれぬへしあまの岩戸の秋のよのそら

恨

たのめとも年のみつもる我中をわすれはてんと又やいのらん  
露のまもみてやわすれむ夜ことにつもるうらみを夢になし□も

この懐紙の右端には裏面から書いた文字があるが、写真版なので判読できない。「月」の歌題歌に「いすゞ川」が詠みこまれているように、「花」歌題歌も「神のおしむ」「神の心」と伊勢神宮に関連した詠草とみてよい。六首のうち「ちることはなくもあらなん春の花神の心に風をまかせて」三三番と（異文なし）、「てる月に」が三三四番と（異文なし）、各々に「智閑集」と一致する。うち、九五番の歌には「柏木殿太神宮へ御参詣の時、花といふ題にて」、三三六番には「柏木殿、太神宮へ御参詣の時、いすゞ川の月をみて」と詞書が付されている。

三首の一致歌のうち二首までが、柏木殿が太神宮へ参詣したときの詠歌であることを指示して共通し、しかも、この懐紙が太神宮関係であることを勘案すれば、先の詞書も信用できるように思われる。

(7) 霧織女帳

智閑

おも影を誰に忍てたなはたのひもたちかくすあまの河きり  
秋きりにたちかくれても七夕の世に名をしのふ契ならずや

荻聲驚眠

まくらさへおきの葉かこつ古さとの夢になふきそ床のさよ風  
秋の夜を誰にとはまし荻の葉の音せぬやともねさめありやと

人傳恨恋

逢みむの夕ははてゝ人中にせめてうらみぬたよりをそ待

波こゆる袂になしてうらみやるたよりもいまやすゑの松やま

この六首のうち「秋きりに」の歌が三〇五番と（異文なし）、「まくらさへ」が二九八番と（五句は「床の上のかせ」）、「秋の夜を」が二九九番と（異文なし）、三首が一致する。

以上の七首の一致歌が確認できるが、「月」「荻聲驚眠」の歌題歌のように、合点歌もそうでないものも、二首とも一括して収載している。

自筆懐紙などの歌と「智閑集」の歌との間に、これまで確認したものでも十首の一致歌があったが、これによって「智閑集」が智閑の詠歌を蒐集整理した家集であることが濃厚となった。また一致歌のうち一つの懐紙をのぞき、他はすべて「貞秀」署名の詠草であったことは留意すべきで、「智閑集」が出家以前のものに相当収めていることを予測させる。

また、合点の有無にかかわらずなく採歌しているのは、特に秀歌撰という編纂意識の稀薄さを示すようでもある。一致歌の範囲で、ほとんど異文がなかったのは、作者自身の推敲の手が加えられていないことになる。

三、詞書の吟味

「智閑集」の詞書には信用しがたいもののあることは、夙に、井上宗雄氏が、「記録類を参照すると、それらの日の中には詞書の如き記事は見えぬ事が多く、信拠し難い点も多いようである」（『中世歌壇史の研究 室町前期』）と指摘され、その後、金子金治郎先生も、「一般に智閑集には、禁裏御会に参会したとか、七十賀に御製を下賜されたなど、智閑を権威づける

もろともに家ちわすれて花のかけにおなし宿とふはるの山人  
。依花惜春、寄花恨恋ノ各二首ヲ略ス

このうち「見すしらぬ」の歌が「智閑集」の一四番と一致する（異文なし）。（なお、この詠草には他にも四首があるので、一致歌があるかもしれない）。

(5) 連峰照村

明ぬれはこなたかなたのみねの雲に夜半のともしのかけも残らず  
ひとりとや木陰の道をいそくらんあまたのみねに見ゆるともしを

閑夜望麥

秋をまつ垣ほの草はつれなくてひとりさひしき床夏のはな

ひかりをや露□のこさむあくるとも月をあるしの庭のとこ夏

閑路行客

せきのとやまた明さらむ月に行よはの旅人やといつるこゑ

すまの浦や閑路すきゆく夕暮に一すちけふる山かけのさと

この六首のうち「ひとりとや」の歌が、二五七番と（異文なし、但し、歌題は「連峯照射」。「大日本史料」は「照村」とするが、歌の内容からみて「射」がよい。翻刻ミスか）「ひかりをや」が二五四番と（異文なし。但し、空白部分は「に」とある）、各々に一致する。

詠草類と「智閑集」との一致によって、「智閑集」には、智閑の歌が収められていることが、ほぼ認められてよからう。

以上の詠草との一致で留意されることは、第一に(4)(5)の詠草が、共に貞秀で出家以前のものであること。これによって「智閑集」には、智閑の出家以前の歌が含まれていることになる。次には、(4)(5)の詠草は、同歌題で各二首宛、計六首詠出し、しかも合点があること。これは多分、ある歌会に提出する三首歌を、前もって六首詠じて、誰かに合点所望をした資料であろう。(5)の詠草の合点歌「明ぬれは」の下句の校異は、作者の推敲

というより、合点者の添削だろう。先の三首の一致歌は、いずれも合点を受けなかったものであるが、これは「智閑集」の性格の一端を示唆している。

昭和五十二年八月に、第百号記念特輯として『思文閣古書資料目録』が出版された。その末尾に「前田家伝来和歌短冊類」として、多数の自筆短冊や懐紙が写真版で掲載されていたが、そこには、室町時代の武家歌人一佐々木、上杉、波多野、一色などはじめ多数の顔触れのものがあり瞠目させられた。なかでも、当面の研究対象とする蒲生氏のもの（智閑、秀行、秀孝、高郷など）が多いのは貴重である。掲載されている智閑関係の短冊や懐紙類は次の七つである。

- (1) 智閑自筆短冊（「藤花始綻」一首）。
  - (2) 智閑自筆短冊（「黒」一首）。
  - (3) 智閑「別後不問恋」和歌二首懐紙。
  - (4) 貞秀「紅梅・春昼恋」和歌二首懐紙。
  - (5) 智閑「五月雨・蚊遣火・名所浦」各二首詠草
  - (6) 貞秀「花・月・恨」各二首詠草
  - (7) 貞秀「霞織女帳・荻声驚眼・人伝恨恋」各二首詠草。
- このうち(1)(2)(3)(5)とは一致歌がみえないが、(4)(6)(7)とは幾首かの一致がある。

紅梅

春も猶木す系につもる白雪の色をほかなる軒の梅かえ

春昼恋

かすむとも月や形見の袖ならむ涙ひる□そ物はかなしき

※懐紙は一首二行書きであるが、一行とする。写真版が小さく不鮮明で解読したいが、どうしても判読できぬところは□と空白にしておく。以下同じ。

文もあるが、やや松平本系よりとみなしてよからう。

このように五本は大差ないので、以下では、書写態度からみて最善本とみなされる、青山本を中心に引用してゆくことにする。

## 二、詠草類との関係

蒲生智閑(貞秀)は近江蒲生郡の豪族で「蒲生系圖」(統類従卷一五七)によると、「刑部大夫(輔イ)、五十二歳而出家。法名智閑。號信樂院。実和田秀憲之子也。」とする。『大日本史料』(九編の五)が引用する「信樂院過去帳」には、

信樂創建智閑大徳

永正十一甲戌巳刻  
春秋七十一歳、蒲生

とあり「蒲生家法號」(近江大徳元吉氏所蔵)にもほぼ同じ記事を示す。

この没年は実隆の「再昌草」の永正十一年五月の条に「智閑法師百ヶ日に、宗碩すゝめ侍し觀経和哥」、翌年の永正十二年三月五日にも「智閑法師一回三月一日遣之」と照合してみても確実である。

ただ、享年は異説があり「大日本史料」引用の「蒲生舊趾考」「蒲生家系圖由緒書」では八十六歳とし、出家年齢も、五十二歳、四十五歳(文明六年)、五十七歳(文明十八年)など諸説がある。

若年時の足跡はほとんど明らかでないが、文亀以降死没までの十数年間は、「実隆公記」「再昌草」などの資料で少し跡付けられる。「実隆公記」によると、米や松茸など、生活物資を盛んに実隆に送りどける智閑の姿がみえ、「再昌草」では智閑邸の歌会に、実隆は毎年のように和歌をつかわしている。

なお、智閑の妻は大藏卿顯長の女で、後土御門院に仕えた背内侍であった。「再昌草」の永正十年十月の条に「智閑法師妻一回とて、品経の歌すゝめ侍し」とあるので、永正九年十月頃、夫に先だつて死没したことになる。

「智閑集」は、全体を四季・恋・雑に部立し、各部立内も勅撰のごとく整然と配列されて見事な構成をとる。歌数は、春(二七八)、夏(二一四)、秋(一五四)、冬(一一五)、恋(一一六)、雑(二七二)で、合計八四九首(歌題のみあって歌本文の欠けているのを加えると、八五〇首)。その大部分は歌題と歌だけを掲載するが、時に詞書があり、詠歌時期や詠歌状況を記す。この詞書には、当時の著名な文化人が顔をだし、信頼できる記事なら、すこぶる注目される。が、先述のように、記録類を参照してみても、その月日に詞書のごとき行事が行われていないケースがあり、全面的には信用しがたい。

このような不審な詞書が散見するところから、詠草そのものも智閑のものかどうか疑念を抱くむきもあるので、まずは、「智閑集」が智閑自身の詠歌を収めているのかどうか、そのあたりから吟味しておきたい。

「大日本史料」(九編の五)には、次の五枚の智閑自筆の詠草を掲載する。

- (1) 近江信樂院所蔵「蒲生智閑和歌懷紙」(一首)
  - (2) 近江信樂院所蔵「蒲生智閑詠草」(「池水久澄」など三首。但し、二首略す)。
  - (3) 近江信樂院所蔵「蒲生智閑詠草」(「雲」など六首。但し、四首略す)。
  - (4) 伊勢竹内文平氏所蔵「蒲生貞秀詠草」(「花下逢客」など六首。但し、四首略す)。
  - (5) 近江中井源左衛門氏所蔵「蒲生貞秀和歌詠草」(「連峰照村」など六首)。
- このうち(1)(2)(3)の智閑詠草と「智閑集」とは一致歌がないが(最も(2)(3)の詠草は全歌を翻字してないが)、(4)(5)の貞秀詠草とは次のような一致歌がみいだせた。

(4) 花下逢客

貞秀

見すしらぬこころともなし花の陰にたもをかはず春のちぎり

は楮紙。墨付一〇三丁。江戸初(寛文・延宝頃か)の書写。奥書はない。現在「蒲生記」と同じ箱に収納されている。

(4) 立教大学本

縦二四・七糎、横一六・八糎。袋綴写本二冊(上冊に春・夏・秋、下冊に冬・恋・雑)。表紙は膚色紙表紙。一面十一行書。歌一首一行書。本文料紙は楮紙。墨付は上冊三九丁、下冊三六丁。奥書には、まず、

此書脇平右衛門尉藤原直弘自寫終  
河村源政朝印

とあり、そのあとに朱筆で、安政六年に門人の稲垣生にこの本を書写させたという翁の識語があり、最後に「巳未孟夏 稲垣久敦写」とあるが、この安政六年四月の書写本とみてよからう。

(5) 金子氏本

縦二九・八糎、横二一・一糎。袋綴写本一冊。表紙は薄茶色無地。題簽はなく、左肩に「蒲生智閑家集」と打ちつけ書きする。一面十行書。歌一首一行書。本文料紙は美濃紙。墨付八二丁。江戸初期写。「樂歲堂圖書印」(朱正方形)などの旧蔵印がある。映入りで、そこには「寛文頃写、松蒲家旧蔵」と記されている。

以上の五本を比較してみると、異本と認められるものではなく、歌の出入りが若干ある程度で、ほぼ同系統とみてよからう。

松平本、天理本、青山本の三本間には歌の出入りは一首も認められないし、青山本で、雑部の七五一番の次が「夜雨」と歌題だけあって「此所哥ナシ」と貼紙のあるところも、他の二本も同様に歌を欠脱している。

金子本も先の三本と大差なく同系統と思われるが、「夜雨」のところは「本ノマ、」とあり歌が欠けている。このほか、「夕恋」の

花にめて月になれぬる夕暮の袂もかくはしほれさりしを (五九四)

を脱落しているが、これは丁の移り目なので誤写したものでらう。また、六七一番の次に七八八七七七七があつて錯簡している。

立教大学本は精査していないが、同系統とみてよい。二三〇番の「五月雨」が歌題だけあって歌本文を欠如しているほかにも数首の脱落がある。

以上の五本いずれも同系統には違いないが、さらに本文面に関して仔細に調査すると若干の相違は認められる。そのなかでは、青山本で

老栽花

わかためはその種ならぬ花をうへて老の哀のしられぬる哉(二二四)とあるところが、松平本では、

わかためは種ならぬ花をうへ置て老の哀のしられぬる哉

とあるのが一番大きな異文である。この部分、天理本、金子本、ともに松平本と一致するので、この二本も、どちらかといえれば松平本により近い系統といえそうである。このことは仔細に、歌題、詞書、歌本文を校合してみれば自ずから納得できる。そのうちの主要なものを表示しておく。

番号	区別	青山本	松平本	金子本	天理本
5	歌	風に	風も	風も	風に
23	歌題	鶯初来	鶯初歳	鶯初歳 <small>紫分</small>	鶯初歳
29	歌題	晚呼子鳥	晚喚子鳥	晚喚子鳥	晚喚子鳥
85	歌	かりかね	衣かりかね	衣かりかね	衣かりかね
109	歌	さそはねと	さそはねは	さそはねは	さそはねは
293	詞書	実澄公	三条実澄公	三条実澄公	三条実澄公
351	歌	もしほ火	ともし火	ともし火	もしほ火
355	歌	秋の	秋や	秋や	秋や
443	歌	紅葉も	紅葉に	紅葉に	紅葉に

この表でみると、松平本と金子本が特に近似し、天理本は青山本に近い本

# 「蒲生智閑集」の成立と性格

稲田利徳

## はじめに

家集を編纂する目的には、我が歌道の営みを集大成して後世に残すため、勅撰集などの撰歌資料として提供するため、あるいは、自己の詠歌理念に即した歌風を宣揚するためなど、種々なものがある。

近江蒲生郡の豪族、蒲生智閑の家集は、約八五〇首を収録し、勅撰集的な部立構成をもつ、よく整理されたものであるが、その詞書を吟味してみると、不審なものが少なからず散見されるなど、奇妙な性格の家集であることが明らかになる。これを後人の作為とみて等閑視するのも見識かもしれないが、なぜ、このような家集を編んだのかという立場からみると、これはこれで考察に値する問題であるし、また、地方武士と文芸のありかたをさぐるためにも意味をもつだろう。

こういった目標を念頭にしながら、以下、「蒲生智閑集」（以下「智閑集」と略称）の諸本や成立の問題に思いをいたし、その性格の一端を浮き彫りにしてみたい。

## 一、諸本

「智閑集」の伝本は多くなく、現在所在が確認されているものには、島原松平文庫本、天理図書館本、篠山鳳鳴高校図書館蔵青山文庫本、立教大

学本、金子金治郎氏本などがある。<sup>註1</sup>

このうち、青山文庫本は『中世歌書翻刻』（第二冊）（稲田浩子編）や『私家集大成中世IV』に翻刻されている。本論考での本文引用や通し番号は『私家集大成』による。

まずは諸本の書誌的解題を施しておく。

### (1) 島原松平文庫本

縦二七・七糎、横一九・六糎。袋綴写本一冊。表紙は濃青色無地の紙表紙。左肩に白色題簽を貼付し「蒲生智閑集」と記す。本文料紙は斐紙。

一面は九行で歌一首一行書。歌題は本文より二〜三字下り。詞書は一〜二字下り。墨付九二丁。江戸初期写。奥書の類はない。

### (2) 天理図書館本

縦二七・三糎。横一九・四糎。袋綴写本一冊。表紙は栗皮色。左肩に題簽があり「蒲生和歌集」と記す。本文料紙は楮紙。一面九行、歌一首一行書。墨付九二丁。江戸中期写。奥書はない。表紙の右肩に「西荘文庫の旧蔵印」。

### (3) 青山文庫本

兵庫県多紀郡篠山町の鳳鳴高校図書館所蔵。縦二八・七糎。横一九・九糎。袋綴写本一冊。表紙は膚色無地で題簽はなく、左肩に「蒲生智閑和歌集」とうちつけ書きにする。一面は八行書で歌一首一行書。本文料紙